

松本市教育研修センターだより

No.45 令和7年12月25日

学びの冬 心温まる「探究」のひとつき

師走に入り、寒さが本格化してまいりましたが、松本市の学校では子どもたちの学びへの熱気が高まっています。今月は、子どもたちの「やってみたい」を支える探究的な学びの実践と、これからの学校づくりを担う研究主任の先生方の学び合いについてご紹介します。

「評価」から「贈り物」へ ～子どもの探究を加速させるフィードバック～

実践校に学ぶ「探究の学び」 中山小学校

12月2日、中山小学校にて「探究の学び」をテーマとした研修会が開催されました。今回の研修では、まず、中山小学校で取り組んできている探究活動の様子をアウトプットする「中山っ子フェス」のリハーサルを参観しました。自分の探究の成果をブース形式で発表する6年生(個の学び)と、協働で創り上げる5年生(グループの学び)。参観した先生方も、ただ見るだけでなく、子どもたちの発表を聞いて実際にフィードバックを送る「参加型授業」となりました。



先生たちが創る、対話の場

授業後の事後研修は、たっぷり2時間を確保。中山小学校の山崎先生と佐藤先生が中心となり進行しました。この研修の特徴は、中山小学校の普段の研修に参加者も混ざって体験的に学ぶということです。そして、グループ協議のファシリテーターは、中山小学校の先生方が務めました。これまでの校内研修で培われた「対話の文化」が、参加した先生方を自然と巻き込み、会場全体が温かく、かつ活発な議論の場となりました。

「指摘」ではなく「未来への足場架け」



研修の後半では、「フィードバック」のあり方について考えました。先生方が子どもに対して行ったフィードバックをふり返し、どんなフィードバックがいいのかを真剣に考えました。「子どもが考えることができるような・・・」「気づいていないことに気づけるような・・・」「自己肯定感が高まるような・・・」など、どんなフィードバックが子どもたちの学びにつながるのか、たくさん語り合いました。

フィードバックとは、単に「できていないことを指摘する(評価)」ことではなく、子どもが自分の現在地に気づき、次の一步を踏み出すための「贈り物(ギフト)」。この視点が、今回のポイント。「やりとり」や「対話」を通じて、子ども自身が思考を整理し、自分らしい学びを創っていく。そのための手助けこそが、私たち教師の役割なのだと再確認する時間となりました。

参加された先生方のリフレクションより

- 子どもたちの発表する姿がいきいきしていてとても素敵でした。やりたいことの学びのすごさを目の当たりにしました。やり取りすることによって子どもはさらに学んでいくことを実践として教えていただきました。
- フィードバックは、子どもが取り組んだ過程を認めること。なぜそうしたのか、どうしたいのかを問い返すことで、思考の整理を促し、自分の思いを言語化することの手助けができる。ポカポカの心で、次に進める。

学校の「OS」をアップデート！ ～「違和感」から始まる組織改革～

令和7年度 第2回研究主任研修会

「新しい教育実践(アプリ)をインストールする前に、まず学校の組織文化(OS)を見直そう」。そんな刺激的な提言から始まった第2回研究主任研修会。講師には、学校法人茂来学園 大日向中学校の青山校長先生をお招きしました。

課題の根っこにある「文化」を見つめる～3つのレベルでの分析～

日々の学校生活で感じる「なんとなく変だ」「うまくいかない」という違和感。青山先生は、それを個人の力量不足で片付けず、3つのレベルで分析する視点を提示されました。

- ・ 事象レベル(表面): 目に見えているトラブルや課題
- ・ 構造レベル(背後): 時間割、校務分掌、評価制度などの仕組み
- ・ 文化レベル(根本): 「前例踏襲」「同調圧力」「子ども観」などの無意識の空気

参加者はワークショップで自校の課題をこの3層に当てはめて分析。「ずっと『事象』への対応に追われていたが、実は『文化』にメスを入れる必要があったのか」と、研究主任として「学校のお医者さん」のように客観的に診断する視座を得ました。

変革への4つのステップ ～「翻訳」と「巻き込み」～

では、その「文化」をどう変えていくか。研修では、具体的なアプローチとして「①可視化・②省察・③翻訳・④巻き込み」という4つのステップが紹介されました。特に注目されたのが「翻訳」です。例えば「自由進度学習」というと抵抗感がある人も「子どもが主体的に自己決定・自己調整・自己評価していく学習」と翻訳すると、その良さが伝わりやすくなります。新しい教育用語や理念をそのまま伝えるのではなく、自校の先生方に伝わる言葉にかみ砕いて翻訳して伝えることの重要性に、多くの先生が頷いていました。また、一人で抱え込まず、まずは思いを共有できる仲間一人から始める「巻き込み」(小さな一歩)の大切さも、これまで頑張ってきた先生方の肩の荷を下ろす一言になったようです。



学習の黄金比は「生徒7:教師3」

また、授業改善のヒントとして示されたのが、「生徒7:教師3」という学習の黄金比です。教師が説明しすぎるのではなく、子どもたちが考え、表現する(アウトプットする)時間をたっぷりと保障すること。それは「子どもに委ねる」ことであり、決して「放置」することではありません。教師が意図を持って関わり、環境を整えることで、子どもたちの主体的で生き生きとした学びが生まれることを、具体的な事例と共に学びました。

参加された先生方のリフレクションより

- 学校の問題をレベル(事象・構造・文化)に分けて考えることで、本質的な課題が見えてきました。「違和感」を大切にし、まずは信頼できる仲間一人と想いを共有することから始めたいと思います。
- 研究主任は「学校のお医者さん」のような立場であるという視点が新鮮でした。学校の課題を文化レベルまで見つめることは容易ではありませんが、やり方によっては一気に「チーム学校」として動き出す可能性を感じ、前向きな気持ちになれました。
- インプット以上に「アウトプット」の時間を大切にすることの重要性を再認識しました。「生徒7:教師3」を意識し、子どもが活動する時間を確保していきたいです。